

# 晩期アランにおける理想的共同体の変遷

— 「農民的構造」から「農村共和連邦」へ —

田伏 也寸志

## 序

「農民的構造 *structure paysanne*」は、哲学者アラン（1868-1951）が1930年代以降使うようになった言葉である。この言葉は、まず『人間論』*Esquisses de l'homme* 所収の「プロポ」のうち的一篇に<sup>1</sup>、次いで『未刊行日記 1937年 - 1950年』*Journal inédit 1937-1950* のなかに陸続と現れる<sup>2</sup>。しかし第二次世界大戦勃発後、「農民的構造」という言葉は、この哲学者の著作からほぼ姿を消してしまう。大戦中のこの沈黙は何によるものだろうか<sup>3</sup>。後年、「農民的構造」という構想は別の言葉で言い表され、指し示されるのだろうか

---

\* 次の略号によって、以下のアラン著作集からの引用を示す。

AD: *Les Arts et les Dieux*, éd. établie et présentée par Georges Bénézé, préface par André Maurois, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1958.

PS: *Les Passions et la Sagesse*, éd. établie et présentée par Georges Bénézé, préface d'André Bridoux, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1960.

Pr. II: *Propos*, t. II, éd. Samuel Sylvestre de Sacy, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1970.

\*\* [ ] によって、引用では省略と引用者の補足を、注では引用書の日本語訳該当箇所を示す。

<sup>1</sup> Alain, *Esquisses de l'homme*, Gallimard, 1938, pp. 124-126 [「四一 農民的構造」、原享吉訳『アラン著作集《4》人間論』（新装復刊版）、白水社、1997、pp. 149-151〕。引用の際、既訳のあるものは参照したうえで、原則として拙訳を用いた。

<sup>2</sup> Alain, *Journal inédit 1937-1950*, éd. établie et présentée par Emmanuel Blondel avec le concours des Amis d'Alain, Équateurs, 2018。本稿では *Journal inédit 1937-1950* を『未刊行日記 1937年 - 1950年』と仮訳し、以下『日記』*Journal* と表記する。『日記』における日付が付された各項目は、単に日記と記す。

<sup>3</sup> リウマチに起因する『日記』の執筆頻度の減少によって、この沈黙は説明されうる。実際、エマニュエル・ブロンデルは次のように書いている。「この〔1933年の定年〕退職は、執筆とある意味では長らく控えてきた政治活動に没頭する生活を予期させるように思われえたことだろう。すでに〔体調不良の〕深刻な危機——1930年代初頭には早くも現れはじめていたのだが——に瀕したことがある体を当てにしていなければ、そうであった〔執筆や政治活動に没頭する生活を予期させていた〕ことだろう。急速に、すべての時間を執筆にささげるというアランの意欲が、

か。そもそも「農民的構造」の意味は何だろうか。本稿ではこれらの回答を試みたい。

「農民的構造」は、アランが『日記』で最重要視しているにもかかわらず、これまで副次的なテーマとして扱われてきた。たとえばジェローム・ペリエは、主に政治的な側面から「農民的構造」について考察しているが、経済的側面については検討していない。また、トクヴィル（1805-1859）を援用した最晩年のアランの政治思想と<sup>5</sup>、「農民的構造」との間の連続性も認めていない<sup>6</sup>。ミシェル・オンフレイは、晩期アランを執拗に批判するなかで「農民的構造」に言及しているものの、「この斬新な農民的構造が何で構成されているか決して正確にはわからないだろう」と詳述を避けている<sup>7</sup>。このほか、

リウマチによって妨げられ、麻痺していった（Emmanuel Blondel, « Présentation », in *Journal, op. cit.*, p. 11. 下線は引用者による。以下同様）。ブロンデルがこのように述べているとはいえ、アランのリウマチの症状が本格的に悪化したのは 1940 年以降のように思われる。この年までアランは定期的に日記を執筆していたことと、政治参加、とりわけ 1938 年のミュンヘン会談前に、エドゥアール・ダラディエ（1884-1970）やレオン・ブルム（1872-1950）らへ電報を打ったり、手紙を送付したりしていることがその理由である（手紙や電報の内容については、『日記』184-186 頁の注を参照されたい）。晩年の苦しみに関しては、「忠実な連れ」であるマリー＝モニック・モール＝ランブラン夫人（1871-1941）がアランの生活の様子を記した簡単な覚書『アルマナ』*Almanach* 中に散見される（「－ [1940 年] 11 月 18 日。起床時に痛み。10 月 2 日以来断念していた日記にアランが 2 ページ書く。夕食時はほどほどで、就寝時に大変痛がる。絶え間ないうめき声。大変痛ましい夜の終わり」（Alain, *Journal, op. cit.*, p. 454）。1941 年から 1943 年までの「農民的構造」に対するアランの沈黙については、慎重を期す必要があるが、第 3 章で説明を試みる。<sup>4</sup> 次の箇所から、アランが「農民的構造」を最重要視していることがわかる。「同日。[1938 年 7 月 17 日] [...] 私はこうして政治に立ち返る。論の流れのなかで本当の民主主義を素描しさえする。「王国ほど従順なものはない。それどころか、王国は諸市民の尊厳という名目で王に命令する、云々。」これは農民的構造に帰着するのだが、モニック [・モール＝ランブラン夫人] は農民的構造のことをばかにする。というのも、モニックはこの固定観念をこれら [『日記』] のページのいたるところで見出すからである。私としては、農民的構造が最も重要な考えであることに自信をもっている、[...]」（Alain, *Journal, op. cit.*, p. 146）。ここでは、固執と言っても過言ではない「農民的構造」への執着が表明されているが、本稿では意義深いものと受けとめ、論を進めていく。

<sup>5</sup> 新田昌英によると、チェリー・ルテールは、博士論文で「アランの著作を四つの時期に分けることを提案している。一番目は [...] クリトンの筆名や実名のエミール・シャルティエ名義でアランが投稿した初期著作の時期（一八九三～一九〇五）。二番目はアランがデベシユ・ド・ルーアン紙にプロボを連載していた時期（一九〇六～一九一四）。三番目はアランが主要著作を発表した時期（一九一七～一九三六）。四番目に晩年に至るアランの著作が日記等のより私的な性格を帯びる時期（一九三七～一九五一）」（新田昌英『アランの情念論』、慶應義塾大学出版会、2014、p. 243、注 3）。本稿でも、上記の区分にならって『日記』を四番目の時期の著作とみなし、その著者アランを「晩期アラン」と定義する。

<sup>6</sup> Jérôme Perrier, *Alain ou la démocratie de l'individu*, Les Belles Lettres, 2017, pp. 398-405（特に p. 405）。

<sup>7</sup> Michel Onfray, *Solstice d'hiver : Alain, les Juifs, Hitler et l'Occupation*, Éditions de l'Observatoire, 2018, p. 26.

エマニュエル・ブロンデルが『日記』序文で<sup>8</sup>、クロエ・ルプランスが「反ユダヤ主義者アラン？ 論争を理解するための著作回顧<sup>9</sup>」で簡単に「農民的構造」に触れているのみである。くわえて、アランの平和主義や反ユダヤ主義的傾向という肝要な問題が、「農民的構造」とともに仔細に論じられてこなかった<sup>10</sup>。

この状況を踏まえて、『日記』を本稿の分析対象の中心に据えた理由は二点ある。第一に、「農民的構造」という言葉の使用頻度がアランの著作で最も高いこと、第二に、2018年に公刊された『日記』全体を扱っている研究が依然として少ないこと、である。以下では、まず「農民的構造」の意味を定義したのち、「社会」という言葉との関連を見る。次に『日記』において密接な関連があると思われるアランの平和主義と反ユダヤ主義的傾向を検討する。これは特に、1938年から1943年の間におけるアランの反ユダヤ主義的傾向の推移が問題となる。最後にアランの「農民的構造」構想、平和主義、反ユダヤ主義的傾向の変遷、アメリカの民主主義が密接に結びついていることを示す。

<sup>8</sup> Emmanuel Blondel, « Présentation », in *Journal*, *op. cit.*, p. 27.

<sup>9</sup> Chloé Leprince, « Alain antisémite ? Retour aux écrits pour comprendre la polémique » [en ligne], *France Culture*, le 7 mars 2018, URL : <https://www.radiofrance.fr/franceculture/alain-antisemite-retour-aux-ecrits-pour-comprendre-la-polemique-7138168>, 2023年8月2日最終閲覧。

<sup>10</sup> 近年、頓に批判的となっているものの、アランの反ユダヤ主義的傾向が批判されはじめたのは、アンドレ・セルナンによる『アラン、市井の賢人』（André Sermin, *Alain, un sage dans la cité*, Robert Laffont, 1985）出版以降である。アラン研究の第一人者であったジョルジュ・パスカル（1922-2014）によれば、次の言明が最も糾弾されている。「1940年7月23日。[...] ドイツ人が勝ってくれればいい。というのも、[シャルル・]ド・ゴール [1890-1970] のような輩がフランスに勝利をもたらしてはならないからだ。注目すべきなのは、戦争が帰着するのがユダヤ戦争、すなわち巨万の富とマカベアのユダを手にする戦争である、ということだ。誰に[その結末が]わかるだろうか？」（Alain, *Journal*, *op. cit.*, pp. 419-420 [ジョルジュ・パスカル『アランの哲学』、橋田和道訳、吉夏社、2012、訳註1、p. 337]。原文の強調（イタリック）箇所には筆者が傍点を付した。以下同様。）この一節しか考慮に入れなければ、アランが「敗北主義者、ペタン派、対独協力者、反ユダヤ主義者、等々」とみなされて当然である（Georges Pascal, « De quelques malentendus concernant Alain et la dernière guerre », in *Bulletin de l'Association des Amis d'Alain*, n°90, décembre 2000, p. 11）。実際、この一節においてアランはナチ・ドイツ体制を間接的に承認しているように見える。そしてアラン自身、高等師範学校入学直後にはすでに反ユダヤ主義的言辞を弄していたと『日記』のなかで認めてもいる。この哲学者が反ユダヤ主義的傾向を備えるに至ったことと、受験準備学級時代の師で「ユダヤ人に対して強い偏見を抱いていた」ジュール・ラニョー（1851-1894）がアランに強い影響を及ぼしていたことは、無縁ではないだろう（*Souvenirs concernant Jules Lagneau*, in *PS*, p. 724 [中村弘訳『ラニョーの思い出』、筑摩書房、1980、p. 32]）。しかしながら、「アランによって署名され、出版されたテキストで、対独協力者と反ユダヤ主義者を励まし、認め、あるいは大目に見るものでさえ一つも存在しない」し、「それどころか、勝ち誇っている敵とともに対独協力の方針自体をアランが非難している非常に明確な著述が存在する」とジョルジュ・パスカルは主張する（Georges Pascal, « De quelques malentendus concernant Alain et la dernière guerre », *op. cit.*, pp. 11-12）。アランのこの反ユダヤ主義的思想の変遷は、第2章で再度検討する。

## 1. 「農民的構造」について

### 1.1. 「農民的構造」とは何か

「農民的構造」という言葉は、『日記』では1938年4月9日付の項目にはじめて現れる。未回答のままだったジャン・ポーラン(1884-1968)の質問表への回答という体裁をとったものである<sup>11</sup>。このなかで、アランは「農民的構造という題のもと政治の要約を企てている」。

最初に言う必要があるのは、上から下への選挙(行政区画とソ連 *les communes et les Soviets*)は完全に抽象的である、ということだ。村における選挙を検討しなければならない。選挙が現実のものであるのは、村においてである。最も優れた人びとが見出され、前に押し出されるのは、村においてである。したがって村を築くだけでいい<sup>12</sup>。

ここで、アランは村における選挙を模範とみなしている。大規模共同体で行われる上位下達的な選挙では、理想的な組織を構築できないが、小規模共同体では可能だからである。言いかえれば、小規模であればあるほど、市民は共同体にふさわしい代表者を直接選ぶことができるのである。こうして、民衆によって「最も優れた人びとが見出され、前に押し出され」、村のなかで中心的な役割を果たすことになる。

それではアランが考える村とは、どのようなものなのだろうか。また、村にはどのような人びとがいるのだろうか。具体例に即して見てみよう。

ところで、ここでは何も偶然ではない。金利生活者の避難所である街の逆だ。村では、少なくとも庭の所有権によって、そして職によって、木工職人・大工・車大工として身が立てられている。人間は「所有権と職の」両方を生み出す。所有権によって職を維持するのである。私は腕の立つ木工職人と知り合った。収穫期の間、この人は木工職人であることをやめ、麦を収穫したものだ。このような人間には、その人に似た、その人のような身なりをしている従業員がいることを人は得心する。子どもたちは一緒に遊び、一種の学校を形成する。神父ないし公証人見習は、読み書きそろばんを教える。マグロワール夫人は料理をする。ここにはすでに、曲

---

<sup>11</sup> アランは、フィンランド戦争 (*Alain, Journal, op. cit., le 11 janvier 1940, pp. 337-340*) に関する記事の検閲に立腹し、ポーランと対立した。本件については、『日記』350頁の注1および *Thierry Leterre, Alain, le premier intellectuel, op. cit.* の486頁を参照されたい。

<sup>12</sup> *Alain, Journal, op. cit., p. 90.*

がりくねった路地によって隔てられたまったく異なる多くの小屋がある。これが村の構成要素である。私は村で政府をまったく目にしない。田園監視員、つまり村長が必要なのである。それゆえ、有力者たちの集会と村議会〔が生じる〕<sup>13</sup>。

ここで思い描かれている村には、大工・木工職人・子ども・神父・公証人見習・料理をする女性などがいるが、「政府」を必要としない。種々の民衆を束ねるごく自然に現れた「村長」が、自らの選出者たちとともに暮らしている。このような組織は、アランにとって違和のない組織である。裏を返せば、もっぱら上位下達的な（「上から下への」）組織は、アランの理想に反した組織と言える。

村で行われる選挙は、アランにとって「完全に抽象的」なものではなく、実感のともなうものである。選挙が下から上への動きから、言い換えれば民衆の目の届く範囲からはじまるためである。

選挙はだから少しも抽象的ではない。農民的構造に組み込まれるのである。〔…〕ストライキも職業組合もまったくない。こうしたものは〔農民的〕構造にまったく存在しないのである。というのも、ストライキでは同類が同類と団結するからである。ところが〔農民的〕構造において、異類と団結するのは異類である。そして、このこと〔異類同士の団結〕が集まった人びとに力を与える。判断は相違によって形成されるのだ。構成員間の接触が緩んだままでなければ、〔農民的構造に〕ふさわしい議長を戴くことになる。こうした議長のなかの議長を集めたまえ、〔…〕<sup>14</sup>。

アランによれば、異なる意見あるいは仕事をもつ人びとが集うと、ストライキも職業組合も存在しなくなる。ストライキを発生させるのは「同類」だからである。農村的組織には、「異類」が集まっているため「ストライキや職業組合もまったくない」。これは「農民的構造」に多様性があることを意味する。それゆえ、「農民的構造」では連合が重要な役割を担う。連合を通して多様な住民の意見が調整できなければならないからである。一見すると上位下達の組織にふさわしい「議長」が「農民的構造」のなかで必要になるのは、住民間の異なる意見を調整するためである。

直上の引用につづく文章では、「農民的構造」と都会的構造との間に大きな懸隔があることが説明されている。

農民的構造は、このように拡張しつつも、街をまったく生み出さない。なぜなら、

---

<sup>13</sup> *Ibid.*, pp. 90-91.

<sup>14</sup> *Ibid.*, p. 91.

街はほとんどだれも他人の世話をしないような構造だからである。街には風習も裁判 *judgement* もない。街はお役所的で画一的な法律が支配している。その代わり、村には小川を汚す権利をもつ豚肉屋の主人しかいない。この権利は判事 *judges* である豚肉屋の主人の顧客に由来する。そしてこれが自然な裁判官である<sup>15</sup>。

ここでは、硬直的かつ画一的で上から下への意思疎通に基づいた、いわゆる官僚的な組織が街の基盤であると指摘されている。このことは、契約や法律が街では「支配」的であることにつながっている。その意味で、この文章は『定義集』*Définitions* における「社会」という語の定義と<sup>こたま</sup> 銜すると言えるだろう。アリストテレス的友愛ないし人同士の相互的好意は、街にも「社会」にも存在しないと定義されているからである。

上記の引用では、アランが「農民的構造」を念頭に置いているからか、基本的に顧客である民衆が決定権を掌握している。一方で民衆が認めた場合に限って、主人にその決定権が委譲される。民衆と主人の間のこの権利の均衡を、アランは「自然な裁判官」と形容している。明らかに、街とはまったく異なる組織をアランは村に見出している。

人は、他人の役に立っているのとちょうど同じ程度までしか、迷惑をかけられない。有益さという概念は、もはや抽象的ではないのである。連帯が感じられていることは話題にされることも、考えられることも決してない。国中のこと（道路や橋等々）を決める村むらの議会が想像される。たとえば、市場は互いに妨げあってはならない。これはどこでも見られることである。誰がこうしたのかを知る人はいないが、全員が望んだのである。あらゆることについて事情は同じである。この自然な構造のなかでは、私は同業者も警察も見ない。戸口の前で治安を維持するのは、豚肉屋の主人である<sup>16</sup>。

「人は、他人の役に立っているのとちょうど同じ程度までしか、迷惑をかけられない」という文では、明らかに、先に引用した一節「[小川を汚す] 権利は、判事である豚肉屋の主人の顧客に由来する」が下敷きになっている。豚肉屋の主人が同じ村の住人に迷惑をかけたとしても、公益のために働き続けている限り、その行為は容認される。街ではおそらく容認されない。街では「官僚的で画一的な法律が支配して」いるからである。村においてのみ利益と損失の均衡、すなわち、もちつもたれつ<sup>17</sup>の関係が考慮されていると言える。「有益さという概念は、もはや抽象的ではないのである。連帯は感じられている」とアランが述べ、お互いの活動を妨げない市場の存在を描写しているのは、まさ

---

<sup>15</sup> *Ibid.*

<sup>16</sup> *Ibid.*

にこの関係を勘案しているからである。連帯が感じられていることが「話題にされることも、考えられることも決してない」のは、単に相互扶助が村では自然に行われているからに過ぎない。

このように、「農民的構造」はある種の理想社会（小規模ゆえに均衡のとれた自治的組織）として提示されている。では、理想社会である「農民的構造」は瓦解しうるのだろうか。また、そうだとすれば、その原因は何だろうか。この疑問に対する答えを示唆しているものとして、1938年7月30日付の日記を確認しよう。

この日記では、農村部と都市部における収穫物の売買の様子を示唆したり（一例として収穫物を載せて都市部へ発つバスが挙げられている）、市が立つ日に「情熱あふれる注意によって値段と貨幣が確認され」るなど活気づいた村の様子を描いたりすることで、「農民的構造」での経済的な循環が素描されている。これらの素描からは、経済的な要素それ自体が「農民的構造」の崩壊に直結しない様子が窺える。では、「農民的構造」の瓦解につながるような（経済的）要素はまったく存在しないのだろうか。

**1938年7月30日。** […] ところで私たちはここで、工業生産物が食料と交換される、あらゆる経済活動の起源にいる。たしかに動きはじめたのに、大きな機械がなぜ回転しないかは理解されない。あらゆる貨幣がそうする[大きな機械が回転する]ように仕向けていて、あらゆる収穫も同様なのに。では誰が止めるのか？ おそらく、大勢の農民たちに片手鍋製造への興味を抱かせる銀行家だろう。ここでは工業－食料の循環が断たれることと、信用が気温のように変わること  
に注意したまえ<sup>17</sup>。

この引用では、「農民的構造」の崩壊につながる人物として、銀行家が示唆されている。「農民的構造」における経済活動（食料と工業生産品の交換サイクルとしての貨幣経済）は、銀行家によって食料生産者が工業生産へ誘導され、食料生産の担い手がいなくなることで、遮断されてしまうからである。これ以降、金融資本主義的な要素が「農民的構造」へ密かに浸透しはじめる。

金融資本主義が波及すると、少数ではあるが「農民的構造」のなかで他者の労働を利用し、富を得る個人が現れる。アランの言葉を借りれば、「それが銀行家だ<sup>18</sup>」。ここで注意が必要なのは、銀行に代表される金融業が発生・発展するのが「農民的構造」の外部ではなく、内部であるという点である。実際、アランは次のように述べている。

<sup>17</sup> *Ibid.*, pp. 152-153.

<sup>18</sup> *Ibid.*, p. 153.

とにかく、公然とあの別の事業 *entreprise*<sup>19</sup>が立ち上げられるのは事実である。そこでは労働者が皆軍人に変貌し、同類を力いっぱい叩いて金もうけをする。この空疎な事業と銀行それ自体の間に恐ろしいほどの類似があることに私は気がついた。そこがつまりあらゆる惨禍の核心であり、農民的構造が自壊する点なのだ<sup>20</sup>。

金融資本主義に引きずり込まれた農民の何人かが、金貸しないし銀行家になって「農民的構造」で経済活動に従事すると、同胞の間で金銭のやり取りが発生し、さらには「同類を力いっぱい叩いて金もうけをする」。このとき、「農民的構造」はもちつもたれつ の関係を基調とする組織ではなくなる。この意味で、「農民的構造」は「自壊する」。アランにとって、銀行と「事業」という二つの金融業の結びつきは数かずの災厄を生み、「農民的構造」を破滅へと至らせる原因となるものなのである。

こうして「農民的構造」が自壊したあと、何が生じるのだろうか。アランによれば、「農民的構造」が再建される可能性は残されているものの、農村的組織は基本的に「都会的構造 *structure urbaine*」に変貌していく。まさにこの瞬間、「最初の銀行」である公証人が金融の魅力で農民たちを魅了するのである。実際、アランは自身の体験に依拠しながら、次のように述べている。

しかし生活の流れは再び緊密になり、構造はできるだけ再建される。都会の恐怖を育むことによって *en cultivant*、こうした災厄のすべてを作り出す都会的構造を想像するのは困難ではないが、この都会的構造は恐ろしいものである。[...] 公証人の金庫が最初の銀行であり、金庫の証書が最初の小切手である。財産目録の王者たちが、農民たちをどれほど容赦なく連れていき、自分たちをどれほど必要とさせるかを見なければならぬ。人はこのことをまったく信じないだろう。見たことがなければならぬから。私の場合、ちょっとした遺産をいくつか処分したことがある。

[そのとき] 公証人たちが敏速で、落とすところを見つけることができ *conciliant*、生まれつきの鑑別家であると私は思った。権利が迅速に金銭へと変化したのだ。そして、農民たちはこの暗算とこの支払い方に感嘆するだろうということが私にはわかった。もし公証人に天才が備わっていれば、自分の主要顧客に公証人の職務に興味をもたせることから始める。そうした職務には、実際、信用貸と前貸金が必要である。ところで農民は、これらの瞠目すべき取引に関する利点に触れていれば、

<sup>19</sup> 銀行と「恐ろしいほどの類似がある」この「事業 *entreprise*」は、おそらくアランがたびたび言及している金貸し *prêteur*、あるいは証券取引所のことを指していると思われる。

<sup>20</sup> *Ibid.*

農民的構造〔が存在する〕にもかかわらず、すぐさま資本家になる。農民の妻がこうした禁断の喜びから夫を遠ざけることを期待しなければならない<sup>21</sup>。

権利を金銭に変換するという金融的技法に幻惑されると、農民たちは資本家に堕してしまう。アランは無力感を抱いているからか、「農民の妻がこうした禁断の喜びから夫を遠ざけることを期待しなければならない」と述べているが、農民の資本への欲望をここで認めていると言うことができるだろう。こうして、「都会的構造」と金融資本主義が不可分のものとなるように思われる。しかし、アランは「農民的構造」の再興を目指す急進的復古主義を捨て去ったわけではない。『マリアンヌ』誌<sup>22</sup>の記事で、「農民的構造」による世界の再構築を提案していることから、そのことが窺える。「農民的構造」の再建というアランの急進的復古主義については、本章の最後で検討する。

以上から、「農民的構造」を暫定的に定義できる。すなわち「農民的構造」とは、金融資本主義と無縁の小規模農村的共同体のことであり、そこでは多様な民衆とその指導者の間で下から上への意思疎通が行われる。「農民的構造」における自治的な側面も、見過ごしてはならない点である。

なお、1938年10月25日付の日記の冒頭には「農民的構造という考えを掲げて、銀行家や配当金のない世界についておおよそのことをつかんでもらうため、〔ジャン・〕ジオノ〔1895-1970〕の本『空の重さ』*Le Poids du ciel* を用いた<sup>23</sup>」と記載されている。やはり、ここでも「農民的構造」を通して実現されるような「銀行家と配当金のない」理想的な世界のことを述べられている。この日記からも金融資本主義的要素が「農民的構造」という理想社会の実現には不要とみなされていることが理解できるだろう。

## 1.2. 「農民的構造」と「社会」の関係

前節では、『日記』に基づいて「農民的構造」の内実を探り、暫定的な定義を行った。その過程で、「農民的構造」はある種の理想「社会」であることが判明した。では、アランは「社会」をどのようなものと考えているのだろうか。『日記』だけでなく、『定義集』の記述も参照することで<sup>24</sup>、この疑問に対する答えを探ってみよう。

<sup>21</sup> *Ibid.*

<sup>22</sup> 1932年に発行されはじめた中道左翼の共和派週刊誌（Michel Winock, *Le Siècle des intellectuels*, nouv. éd., Seuil, 1999, p. 333 [塚原史・立花英裕・築山和也・久保昭博訳『知識人の時代』、紀伊國屋書店、2007、p. 303]）。

<sup>23</sup> Alain, *Journal, op. cit.*, p. 199.

<sup>24</sup> 『定義集』は死後出版だが（1953年初版刊行）、起草自体は『日記』執筆時期にほど近い1929年から1934年の間であると推定されている（モーリス・サヴァン「日本版に寄せて」、神谷幹夫訳『定義集』、岩波文庫、2003、p. 14）。

**社会 SOCIÉTÉ** 連帯の体制。自然的な部分もあるが、意思的な部分もあり、私たちの同類集団とともに「形成される」。社会の絆には、事実によるものであって選択されたものではない部分、〔すなわち〕課せられた部分があるが、意志によって選択ないし認められた部分もある。社会生活のあらゆる逆説は、この混合に由来する。そして、偶然と友愛 *amitié* による部分がない団体 *association* は、社会とは名づけられえない。社会契約は、結局、甘受されている *être subi* ことを愛されている *être aimé* こととして自発的に捉えなおさせているにすぎない。契約に基づいた社会は本当の社会ではない。銀行に破綻の脅威があるとすぐ、全員が資金を引き出し、銀行を見捨てる。本当の社会は、家族、友愛（アリストテレス）、そして家族の延長 *extensions* に基づいている<sup>25</sup>。

上記引用の下線部では、金融資本主義が浸透した社会のことと考えて差し支えないだろう。直後の文で、金融資本主義の中心である銀行が例に挙げられているからである（下線部直後の「銀行に破綻の〔…〕銀行を見捨てる」という文は、世界恐慌下の人びとの行動を想起させる）。この「社会」という語の定義において強調しておきたいのは、銀行が存在する契約を基盤とする社会、すなわち金融資本主義社会が、アランにとって「本当の社会ではない」という点である。この点に、『定義集』における「社会」の定義と「農民的構造」の間には関連が認められるからである。

『定義集』におけるこの「社会」の定義を念頭に置いたうえで、今度は1943年10月19日付の日記を見ると、類似した内容が含まれていることがわかる。

**1943年10月19日。**〔…〕二種類目の社会は、物によって結びつけられ、支配されている社会である。たとえば金融資本家は、株式相場が支配する類の社会を形成しているが、株式相場がなくとも、いくつかの銀行によって農耕生活 *terre* の周囲で株式それ自体と関係のある社会を形成する。今、こうした類の社会が観察されはじめているが、この観察は実際大いに役立つ。銀行家の社会に規則をもたらすのは、富の重さとある種の意見である。この巨大な集団を決して群衆とみなしてはいけない<sup>26</sup>。

この日記で、アランは「社会」を三種類挙げているが（一種類目の社会は「群衆 *foule*」）、

<sup>25</sup> *Définitions*, in *AD*, pp. 1089-1090 [神谷幹夫訳、前掲書、p. 151。米山優『アラン『定義集』講義』、幻戯書房、2018、p. 748] .

<sup>26</sup> *Alain, Journal, op. cit.*, p. 571.

三種類目の社会は「宮廷 Cour」）、二種類目の社会を「物によって結びつけられ、支配されている」社会であるとし、そこでは「富」（と「ある種の意見」）が重きをなしている」と述べている。ここでも、金融資本主義社会の中心的役割を担う「金融資本家」あるいは「銀行家」という言葉が「農耕生活」とともに登場する。この引用箇所では、銀行や金融資本主義社会が表立って批判されているわけではない。しかし、『定義集』におけるように、「社会」を「家族の延長」として捉えるならば、契約を基盤とする金融資本主義社会がアランの批判対象となるのも、もっともなことである。実際、「農民的構造」構想が展開されるアランの『日記』で、主として批判の対象になっているのは、まさにこの二種類目の社会なのである。

多様な事柄を内包する「社会」という言葉の範囲を限定するのは難しい。しかし、これまで見てきた引用に基づき、契約がない「家族の延長」に基づいて形成された集団であるという「社会」の側面は強調しておきたい。事実、1929年8月24日付のプロポでも、家族の延長のような「社会」では相互扶助が存在するとアランが述べていることから<sup>27</sup>、アランがこの側面を重視している様子が窺える。これに加えて『日記』では、経済面への言及が増えるとともに、資本家と銀行家の支配する集団に対する批判は引きも切らない。このことから、実現可能か否かにかかわらず、逝去まで構想にすぎなかった「農民的構造」は、アランにとって「社会」の一形態（そしておそらくその最上の形態）であったと言えることができるだろう。

ここまでの「農民的構造」と「社会」に関する文章において、経済面とりわけ金融資本主義(的な要素)を強く批判している場合が多いことを見てとることができた。では、この金融資本主義社会の主要な担い手を、アランは一体誰だと考えているのだろうか。次の長い日記の引用を通じて、そのことを探してみたい。

**1941年12月10日。**私は常に、迂遠な歩みによって、今以上に理解することが決してないであろう政治分析に立ち返る。たとえばスタンダールは、『イタリア貴族』*Le Gentilhomme italien*<sup>28</sup>のなかで、ナポレオン政治の動機 *ressorts* を浮き彫りにしている。教皇の誘拐は、常に些細な細部によって、壮大な物語の一ページである。召使は忠実だが、金欠のまま危機的状況に残されたと教皇を責める。場面はいくつかの身ぶりに集約される。教皇は人 [= 召使] が金を取らなかったというしぐさをする。ラベ [修道会] 総会長は教皇が金を払うというしぐさをする。教皇は財布のな

<sup>27</sup> *Pr. II*, p. 796, le 24 août 1929.

<sup>28</sup> スタンダール作とされている『イタリア貴族の思い出』*Souvenirs d'un gentilhomme italien* のことか。しかし、フィリップ・バルチエはこの作品が本当にスタンダールのものか疑問視している。詳細は以下を参照されたい。「Notice」des *Souvenirs*, in *Œuvres romanesques complètes de Stendhal*, t. I, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2005, pp. 856-857.

かに手を突っ込んで、四ナポレオン金貨を取り出し、召使に与える。それゆえ……それゆえ……云々。たしかにこれは大きな金銭的身ぶりである。少なくとも私はこの身ぶりに吝嗇をまったく見ないし、財布にはおそらく一万フランが入っていただろう。見捨てられさえし、取るに足りない自分の天才に委ねられた人びとによって、すべてがなされ、天才が発展する *foisonne*。これがユダヤ人の靈感 *veine* である。泉は神によって着想を得て *être inspirée de Dieu*、ユダヤ人は金を失うと、次のように言う。「[私が金を失ったのは] 妻が神に耳を傾けてもらう方法を見つけてしまっていたからなのであり、神は私が不幸であることを望んでいた」と。神の靈感 *inspiration divine* に従っているなら、他に何と総括できるだろうか？ 万事が売ることによって有益であり、金が戻ってくる。私にとって、カルマン＝レヴィイの政治はこのようなものだった。カルマン＝レヴィイは身を危険にさらし、財産を築いた。ユダヤ人には本当に計り知れない商才がある<sup>29</sup>。

この引用で下線を付した箇所（「ユダヤ人には本当に計り知れない商才がある」）は注意に値する。ユダヤ人と商才をアランが関連づけていることが明瞭に看取できるからである。とはいえ、このユダヤ人と商業のイメージの結合は、アランの独創によるものではない。近代における両者のイメージの結合自体は 19 世紀に端を発しており、たとえばシャルル・フーリエの作品にすでに見られるものだからである<sup>30</sup>。むしろ晩期アランは、近代以降に見られた固定観念に基づいて金融資本主義を告発し、「農民的構造」構築（再興）の必要性を主張している可能性が高い。

「農民的構造」構想は、「農民的経済」として言及されることもあるが、ユダヤ人と商業（または金融資本主義）の結びつきを考慮に入れると、アランの平和主義と反ユダヤ主義的傾向と密接な関連があるように思われる。つまり、ユダヤ人が中心的役割を担う金融資本主義社会（都市的構造）を「農民的構造」によって置換することで、平和的な共同体の構築をアランは目論んでいたと推察される。最後に本章の締めくくりとして、1938 年 11 月 9 日号の『マリアンヌ』誌におけるアランの記述を確認してみよう。

最重要の考えが取り上げられているのだから、ジオノが行っている見事な説明だけは強調しておきたい。この説明は全員を納得させるはずである。実際、文明を消し去るような、そして私たちにすべてをやりなおさせるような、何らかの大惨事について熟考しなければならない。何によって私たちはやりなおすだろうか？ 農

<sup>29</sup> Alain, *Journal*, *op. cit.*, p. 505.

<sup>30</sup> このテーマについては、次の論文に詳しい。Paul Bénichou, « Sur quelques sources françaises de l'antisémitisme moderne », *Commentaire*, n° 1, 1978, pp. 67-79.

農民的構造によってである。手はじめに、人間は農民でなければならない。そうしなければ、人間は少しもいないだろう<sup>31</sup>。

ここには、アランの急進的復古主義が現われている。「文明を消すような何らかの大惨事」のあとで「農民的構造によって」「すべてをやりなおさ」なければならないと述べられているからである。ここで言う「文明」は、これまでの引用に基づけば、銀行が大きな役割を担う近代文明または金融資本主義社会を指していると解釈できる。「農民的構造」によって再建される文明は、アランが理想とする「社会」と言えるだろう。

## 2. アランの平和主義と反ユダヤ主義的傾向

第二次世界大戦後の「農民的構造」を中心としたアランの思想を見る前に、第二次世界大戦前とその最中のアランの平和主義と反ユダヤ主義的傾向に目を向けたい。戦後のアランの思想的変遷をたどるうえで、重要と思われるからである。

### 2.1. アランの平和主義

ミシェル・ヴィノックによれば、アランはドレフュス事件以前から「反軍国主義者で反好戦論者<sup>32</sup>」であった。それでも、銃後の平和主義者に徹していたわけではない。1914年時点で46歳であり、高校哲学教師でもあったアランは、従軍義務がなかったにもかかわらず、進んで戦争に参加した。第一次世界大戦におけるこの経験は、アランに衝撃を与え、『軍神または裁かれた戦争』*Mars ou la guerre jugée* 等の著作執筆につながった。

第二次世界大戦の開戦前夜も、アランは平和主義者でいつづけた。これは、1934年（ヒトラーの権力掌握翌年）に設立された反ファシズム知識人監視委員会（Comité de vigilance des intellectuels antifascistes、以下 CVIA）の副会長をアランが務めたことと、その平和主義陣営の急先鋒に立っていたことから明らかである。

このように平和を希求していながら、ヨーロッパの安寧を破ることになるヒトラーの危険性を、アランはあまり認識していなかったように思われる。ヒトラーに対するアランのこの認識の甘さは、何に由来するのだろうか。1933年6月25日付のプロポを見てみよう。

<sup>31</sup> Alain, « Le Poids du ciel », *Marianne*, 9 novembre 1938, deuxième paragraphe. 内容は Gallica で閲覧可能。アランの文章は1・3面に掲載されている (<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k76437343/f1.item>, <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k76437343/f3.item>, 2023年8月2日最終閲覧)。本引用は1面の内容に基づくものである。

<sup>32</sup> Michel Winock, *Le Siècle des intellectuels*, op. cit., p. 308 [塚原史・立花英裕・築山和也・久保昭博訳、前掲書、p. 281]。

ヒトラーの危機を前にしても、私の反応は鈍かった。遠く離れたところでの出来事は、私の心を滅多に揺さぶらない。高潔な人びとがいて、私を冷淡 *insensible* だと非難した。そしてたしかに私は、不正が地球のどこで行われていても、ただちに憤慨するような人間ではない。アルメニア人の虐殺がフランスで話題になっていたとき、スタンダールが虚しい憎悪と呼ぶものを、私は決して虐殺者に対して感じていなかった。そしておそらく、私の手が届かない範囲のことは、私の興味をあまり引かないと言わなければならないだろう。私にできることが何もないからだ<sup>33</sup>。

「遠く離れたところでの出来事は、私の心を滅多に揺さぶらない」という一文に、アランの認識の甘さの理由が垣間見える。アランのフランス中心主義が見てとれるからである<sup>34</sup>。実際、アランがヒトラーの人種主義に強い関心を寄せ、『わが闘争』を読みはじめるのは、ナチ・ドイツがフランスを占領する 1940 年以降のことである。上記引用のプロポ掲載時点では、ヒトラーの脅威を大半のフランス人（と平和主義者たち）は楽観

<sup>33</sup> *Pr. II*, p. 963, le 25 juin 1933. 村上祐二は、本件に関して、フランスで悪魔と思われていたドイツ人を「食人種の擁護者であるモンテーニュのやり方で」アランが弁護していると述べている (Yuji Murakami, « La Mémoire de l'Affaire chez les écrivains pendant et après la Grande Guerre », in « *J'accuse... !* » a 120 ans. *Approches pluridisciplinaires de l'affaire Dreyfus*, sous la dir. d'Isabelle Schaffner, Olivier Bertrand et Julie André, préface par Jacques Biot, entretien avec Charles Dreyfus, Les Éditions de l'École polytechnique, 2020, p. 50)。

ところで、このプロポとクロード・レヴィ＝ストロースの『人種と歴史』所収の「自民族中心主義」を読むと、以下の引用箇所が論理展開と表現の間に類似が見られる。逆説的な言説を用いながら、なじみのない人びとや文化に対して排斥的な態度をとることそれ自体が「野生人」と同じであることを両者とも指摘している。「そのこと [= 人類の無分別は至るところで同じであること] に注意しなければ、人が話していることの前では私たちは愚かであることだろう、それは野生人の風習の前では愚かである人がいるのと同じことである。野生人は、私たちのものとはかけ離れた、なじみのない言葉やしきたりを引き合いに出す。そして、好んで野生人と私たちの間に共通のものは何もないと言う。これがまさに、野生人が私たちのようだと思う瞬間である」。  
(*Pr. II*, p. 964.)

「最も古くからある態度は、われわれが自分のものだと思っているものから最も遠くかけ離れた道徳的、宗教的、社会的、美的な文化形態をただひたすら拒絶することにある。[...] 「野生人の習慣」、「それはわれわれのやり方ではない」、「そんなことを許してはならない」等々、[...]。／「野生人」（あるいは人がそうみなそうとするすべて）を人類の枠の外に放り出すことの根拠となるこの思考態度は、まさにこれら「野生人」自身の最も顕著で特徴的な態度である」。

(Claude Lévi-Strauss, « III L'ethnocentrisme » du *Race et Histoire*, in *Anthropologie structurale deux avec 13 schémas dans le texte*, coll. dirigée par François Laurent, Plon, 1996, p. 383 [渡辺公三・三保元・福田素子訳『人種と歴史／人種と文化』、みすず書房、2019、pp. 34-36]。)

<sup>34</sup> Michel Winock, *Le Siècle des intellectuels*, op. cit., p. 310 [塚原史・立花英裕・築山和也・久保昭博訳、前掲書、p. 282]。ヴィノックによれば、このフランス中心主義は当時のフランス知識人の間に根強く広まっていた。

視していた<sup>35</sup>。そうした当時の空気を反映した結果ではあるだろうが、今日このプロポを読むと、ヒトラーの平和への脅威をアランが過小評価していたと言わざるをえない。

だからと言って、フランスが戦争に巻き込まれるのを手をこまねいて待っていたわけではない。先の引用で、自らの手が届く範囲のことにしか興味がないと主張してこそのいるが、1938年にはレオン・ブルムやエドゥアール・ダラディエに電報や手紙を送るなど、政治参加を行っている。この二つの言動は、見かけほど矛盾しているわけではない。実際、アランにとって重要なのは、是が非でも戦争を回避することだったからである。『日記』には、ミュンヘンでの英仏独伊による四首脳会談によって、戦争を回避でき「ほっとした<sup>36</sup>」と書かれている。フランス中心主義も政治参加も、戦争を回避しようとするアランの心情から発したものと言えるだろう。

なお上記の引用中で、アルメニア人ジェノサイドの責任者たちに対して「虚しい憎悪」を感じなかったと書かれているが、これはアルメニア人への敵意ゆえにアランが暴力を容認していたことを意味しない。当時のアルメニア人は、ユダヤ人同様特定の祖国をもたず、商業で生計を立てていた。それゆえ、アランの反ユダヤ主義的傾向がユダヤ人の経済的な役割にのみ結びついていたら、そしてアランがユダヤ人に対して根深い憎悪を抱いていたなら、金融の支配者でありながら世界中でよそ者に過ぎなかったアルメニア人に対しても、アランはおそらく敵意を示していたことだろう。しかし、上記引用で表明されているのは、物理的な距離と結びついた一種の無関心である。この心的傾向に基づいて、本章第2節でアランの反ユダヤ主義的傾向の変遷について解釈を試みる。

アランの平和主義はフランス中心主義と関わりが深い<sup>37</sup>、フランスが戦争に巻き込まれた第二次世界大戦中はどのような態度が見られるのだろうか。『日記』に基づいて確認してみたい。

**1940年7月19日。** [...] 運命の報復ないし急変を期待するのは無駄だ。私たちは地上で死んでいるのであって、そのことを認めるだけでいい<sup>38</sup>。

<sup>35</sup> André Semin, *Alain, un sage dans la cité*, op. cit., p. 386.

<sup>36</sup> Alain, *Journal*, op. cit., le 29 septembre 1938, p. 190.

<sup>37</sup> ジャン＝マリー・アレールによれば、第一次世界大戦以前からアランはプロポで国外の平和についてあまり話題にしなかったが、1911年のモロッコ事件を機にドイツがフランスの脅威となつてから、この傾向が突然変化した。本件については、以下を参照されたい。Jean-Marie Allaire, « Un citoyen prend la parole », in *Premier journalisme d'Alain. Les Années d'apprentissage 1900-1906*, édité par Jean-Marie Allaire, Robert Bourgne et Pierre Zachary avec la coopération de Georges Pascal, Institut Alain, 2001, p. X.

<sup>38</sup> Alain, *Journal*, op. cit., p. 415.

この日記はフランスがナチ・ドイツと休戦協定を締結した翌月に書かれたものだが、この一節を読むと、「敗北主義者」というアランの評判が思い浮かぶ。フランス国民に現実を受け入れるよう、アランが説得を試みているように思われるからである。上記引用に基づけば、アランをナチスの蛮行に目をつむる対独協力者とみなすことさえ可能だろう。しかし、1939年5月12日付の日記はアランが対独協力者でないことを示している。

**1939年5月12日。** […] 結局、平和主義者はあまりいない。今、私はヒトラーと外交上の席で次の問いについて論じてみたいと思っている。「戦争の本丸（倉庫）ではなく、住居を標的とした爆撃をあなたは認めますか？」どのような無頓着によれば、こういった類の命題がばかばかしく思われるだろうか？ 勝利のことを考えるからである。〔勝利のためなら〕ローマ市は破壊されるだろうと一般に考えられている。この考えだけで、あらゆる民族がひどく脅かされる<sup>39</sup>。

この一節で、アランは市民が巻き添えになる戦争に徹底的な反対を表明しているだけでなく、ヒトラーに対する反対も示している。同時に、勝利よりも平和を優先するアランの平和主義も見てとることができるだろう。このアランの平和主義は、1940年7月23日付の日記でも見受けられる。

**1940年7月23日。** イギリスへ向けて発つ軍隊の足音が聞こえる。悲劇的な現在において、フランス人が皆同じ陣営に属しているということ、人はさぞかし知りたいだろう。しかし、反対である可能性が高い。イギリスがドイツに借りを返すことを期待するフランス人もいるのである。これによって、わが国に戦争とさらに強制移住の幸福がもたらされる<sup>40</sup>。

この箇所においても、アランが「敗北主義者」あるいは「対独協力者」に見えるかもしれない。しかし、この評判は後世の回顧的な評価でしかない。この引用では、アランが戦争の長期化に反対していることが看取できるうえ、戦争の早期終結によって訪れる平和をアランが希求していることが理解できるからである。アランは、戦争開始以前は最後まで戦争回避を模索する一方、ナチ・ドイツによる占領後は一刻も早い国内の平穏を願う平和主義者だったのである。

ところで、ヒトラーの政策の人種差別的性格を当初アランが見抜けなかったのは、無関心による無知が理由だったと思われる。実際、ヒトラーの著書『わが闘争』を読んだ

---

<sup>39</sup> *Ibid.*, p. 283.

<sup>40</sup> *Ibid.*, p. 418.

アランの反応が、それを裏づけている。

**1940年7月24日。**『わが闘争』。[…] ヒトラーの精神のなかで人種差別的な考えがどのように働いているか、そして、その考えが別の分析のかげらをどのように集めているかがとてもよくわかる。おそらく、政治的な思想がこれほど率直に明らかにされたことは、いまだかつてなかっただろう<sup>41</sup>。

この著作に含まれている記述を目の当たりにした1940年以降、ヒトラーにアランが好意的であったとは到底言えない。ヒトラーの考えを直接確認してから、アランは自身の反ユダヤ主義の内省に身を委ねていくように思われる。

## 2.2 『日記』におけるアランの反ユダヤ主義的傾向の変遷

アランの反ユダヤ主義は、これまでも批判されてきた。近年では、ミシェル・オンフレーがその代表格である。実際オンフレーは、「ユダヤ人の愛人たち<sup>42</sup>」がいても反ユダヤ主義者だったピエール・ドリウ・ラ・ロシエル(1893-1945)と比較し、ユダヤ系の友人がいても反ユダヤ主義的な言辭を弄したアランの自家撞着を指摘している。

アランの専門家であるチェリー・ルテールは、オンフレーの指摘に補足を加えながら反論している。ルテールによれば「[アランの反ユダヤ主義的] 見解には、それによって明らかになる立場の非一貫性以外に興味深いところはない。ドリウとの比較は、その卑しさも加わって、ばかげているのである<sup>43</sup>」。また、「ドリウの立場は[当時から]かなりよく知られていた<sup>44</sup>」一方、アランの反ユダヤ主義的な立場は友人たちに衝撃を与えたことだろうと評している。つまり、ドリウとの比較はそもそも成立しないし、アランを反ユダヤ主義者とみなすのも無理があると言うのである。アランの反ユダヤ主義的傾向に関するオンフレーの指摘に真正面から答えていない分、ルテールの反駁はやや不十分であるように思われる。しかし、ルテールの説明によって、生前のアランにおける反ユダヤ主義的傾向が私的なものであったことが理解できる。では、私的な性格の濃い『日記』において、どのような記述が見受けられるのだろうか。また、その内容に変化はあるのだろうか。順次確認していきたい。

1938年1月28日付の日記の抜粋では、アランの反ユダヤ主義的傾向の実態が率直に表明されており、一種の告解のような趣がある。

<sup>41</sup> *Ibid.*, pp. 422-423.

<sup>42</sup> Thierry Leterre, *Alain, le premier intellectuel*, op. cit., note 103, pp. 567-568.

<sup>43</sup> *Ibid.*, p. 568.

<sup>44</sup> *Ibid.*

私としては、反ユダヤ主義から解放されたい。しかし、まったくそうすることができないでいる。こうして私は、あまり好きではない友人たち、たとえばレオン・ブルム [1872-1950] と一緒にいるのである。私は軽薄な指摘を忘れるべきなのだが、実際には、憤慨しながら [アンリ・] ベルクソン [1859-1941] の悪文を読むと、ベルクソンがユダヤ人であることを少しも忘れられない。そして、その点で私は自分が不当であると感じている<sup>45</sup>。

この時点では、アランは完全に両面的な感情の虜であるように思われる。自らの反ユダヤ主義をうちあけつつ、アランはそこから解放されることを望んでもいる。また自分の態度が不当であると自覚しながら、完全に否定することもできないでいるからである。

しかし、この内面の葛藤には変化が現れる。1940年8月2日付の日記では、若年時の自らの反ユダヤ主義を思い起こしつつ、アランは次のように書いている。

ところで高等師範に入学してすぐ、ありふれた呼びかけ（ユダヤ人め！）によって並外れた悪評を築きながら、軽率にも反ユダヤ主義の議論に私が身を投じたことは、友人である [レオン・] ブランシュヴィック [1869-1944]、[エリー・] アレヴィ [1870-1937]、[アンドレ・] レヴィ＝ウルマン [1875-1955?] <sup>46</sup>、[レイ・] アイゼンマン [1867-1937] らを悲しませた<sup>47</sup>。たしかなのは、観念を作りあげずに判断してしまったというこの誤りから、私がこの先、立ちなおらないだろうということだ。二通りのやり方で、この誤りからは逃れえた。株式会社によって観念を形成するか、さもなければ形而上学に基づいて観念を形成するか、である。私はそのようなことは何も考えたことがない。私はこの立派な労働者たちをばかにしただけだった。のちにベルクソンを認めなかったように、私はこの労働者たちを認めなかったのである。もう一つの軽率な言動だ！ 以上が若いころの常軌を逸した行いの数かず *mes folies de jeunesse* である。つけ加えておく必要があるが、ヒトラーの暴力によって私は常に憤慨してきたし、ユダヤ人大虐殺 *pogroms* を望んだことも期待したことも一度たりとてなかった<sup>48</sup>。

ナチ・ドイツのユダヤ人迫害に直面したあと、自らの反ユダヤ主義的傾向を回顧しながら

<sup>45</sup> Alain, *Journal*, op. cit., p. 63.

<sup>46</sup> パリのやり手弁護士。収集家、劇の愛好家でもあった (note 2 du *Journal*, op. cit., p. 430)。

<sup>47</sup> アイゼンマンは歴史家 (note 1 du *Journal*, op. cit., p. 431)。

<sup>48</sup> *Ibid.*, pp. 430-431.

ら、高等師範学校入学直後にユダヤ人への一種の敵意を示していたことを白状している。ここで、アランが過去の言動を正当化しようとしていることは否定できない。しかし、アランの反ユダヤ主義が暴力をともしない急進的なものではないことに注意しよう。実際、日記のこの一節のなかでアランが釈明しているのは、常套句しか公言しなかったこと、反ユダヤ主義的主張を彫琢しなかったことである。またアランは、ユダヤ系フランス人であるブランシュヴィックやアレヴィのような友人たちを「悲しませた」ことを悔いている。アラン自身、当時の言動に正当性があまりないと判断しており、愚行の数かずを若者特有の過激な熱意に帰している。上記引用の末尾で、ヒトラー（とナチ・ドイツ）の暴力や人種差別的な行動に対してアランは明確に反対している。この時点でヒトラーへの評価を改めたことが、ここからも読みとれるだろう。以上より、本稿ではアランを筋金入りの反ユダヤ主義者とはみなさない。むしろ、ヒトラーの危険性を過小評価した結果、1940年まで反ユダヤ主義的言辭を弄していただけであると解釈する。

なお、アランが自らの反ユダヤ主義的な傾向から距離をとりはじめたことは、1943年9月19日付の日記によっても理解できる。

幸いなことに反ユダヤ主義はまもなく終わり、[その終焉によってユダヤ人の] あらゆる陰鬱な亡命に終止符が打たれるだろう。私にとって不幸なのは、このむごい狂気に対して少し寛容でいてしまった que j'ai eue ことだ<sup>49</sup>。

上記引用の下線部で、アランは接続法過去形を用いている。これは、アランが自らの反ユダヤ主義的傾向が完了したものと捉えていることを裏づけるものである。ここから、反ユダヤ主義的傾向に関する一種の自省、および一種の明確な転向がアランのなかで生じたと言える。「少し寛容でいてしまった」という言葉が過去の言動の正当化を図るものだとしても、「幸いなことに Heureusement」という語や、反ユダヤ主義的傾向が「むごい狂気」と形容されていることから、アランの反ユダヤ主義的傾向の変遷を看取してよいだろう。アランは時折ユダヤ人に対して辛辣な態度を示してこそいたが、ユダヤ

<sup>49</sup> *Ibid.*, p. 553. 1943年9月20日の日記からも、アランの反ユダヤ主義的思想の転向が明確に看取される。完了相を意味価値としてもつ複合過去形が用いられているからである。「1943年9月20日。[...] 確信がもてる立場に今や私はたどりついた [Je suis arrivé maintenant à une position que je crois forte [...]]。それは、平和な未来のために、政治を担っているであろうフランスユダヤ党の再建を期待することだ。加えてこの党は、間もなく終わりを告げる対独協力でたるんだ政治という過ちによって私たちにかくも欠けていた [アンドレ・] モーロワ (1885-1967) やロラン・ボリス [編者注：おそらく1927年に『ラ・リュミエール』*La Lumière* 紙を創刊し、レオン・ブルム内閣で1938年に官房長を務めたジョルジュ・ボリス (1888-1960) のこと] のような指導者とともに、多くの金とほぼすべての産業を手中にしているだろう」 (*ibid.*)。

人差別を助長していなかったとするジョルジュ・パスカルの分析に本稿もならう。

### 3. ドイツからアメリカへ？

第二次世界大戦前後まで、アランが「農民的構造」を重要視していたのは第1章ですで見たと。ところが1940年以降、アランが自らの反ユダヤ主義的傾向について内省するようになった影響か、「農民的構造」については沈黙が保たれており、関心がなくなったように思われた。他方で、とりわけ第二次世界大戦終結ごろから、アメリカへの言及が『日記』において増えはじめる。アメリカに対する言及のこの増加は、「農民的構造」構想と何か関係があるのだろうか。『日記』の後半部に沿って探ってみよう。

#### 3.1. 第二次世界大戦後のアランの変化

1945年の日記では、アメリカの民主主義とともに、長らく「忘れられた思想家<sup>50</sup>」であったトクヴィルへの言及が見られる<sup>51</sup>。『アメリカのデモクラシー』の要約を行ったのち、アランは『政治概論』*Sommaire de politique* または『初心者のためのマキアヴェッリ』*Machiavel du pauvre* というタイトルの書籍執筆計画を明かす。この書籍が「マルクスよりも先に進み、村と農民の諸体制によって *par des institutions municipales et paysannes* 連邦政治を準備するだろう」とアランは述べている<sup>52</sup>。別の表現ではあるが、ここでは「農民的構造」と同様の政治的共同体がアメリカ合衆国の連邦制の基礎をなすものとなさされている。

別の一節でも、「農民的構造」への関心をアランがもちつづけていたことが窺える。パリ解放直前である1944年7月24日付の日記を見てみよう。

1944年7月24日。戦争。[...] どのようにすべてが再建されるだろうか、と[アンリ・]ブッシュが尋ねた<sup>53</sup>。ここにはまだ可能性の高いことがある。すべては労働によって再建されるであろう。このこと[労働による再建]は、農業労働を招き *entraîne*、同時に家族を築く。そして同時に、農民的村会議員団 *municipalités paysannes* によって権力を築く。その点に関しては、あまり議論がないだろうと私は思う<sup>54</sup>。

<sup>50</sup> 宇野重規『トクヴィル 平等と不平等の理論家』、講談社学術文庫、2019、p. 100。

<sup>51</sup> Alain, *Journal, op. cit.*, pp. 640-642, sans date.

<sup>52</sup> *Ibid.*, p. 642.

<sup>53</sup> エマニュエル・ブロンデルによれば、ブッシュは「高等師範学校卒業生（1913年入学）で、経済の専門家、パイロット、第一次世界大戦中は飛行士」であり、「『ラエロノティック』誌 *L'Aéronautique* 同様、出版社であるゴーティエ＝ヴィラルール社 *Gauthier-Villard* も1919年から1940年まで」指揮した（Note 5 du *Journal, op. cit.*, p. 43）。

<sup>54</sup> *Ibid.*, pp. 623.

この一節は、本稿第1章末尾で引用した1938年の『マリアンヌ』誌の記事「空の重さ」に呼応している。実際その記事では、すべてが「農民的構造」によって再興される必要があることをアランは説いていた。1944年の時点でも、すべてが（農業）労働によって再建され、「農民的村会議員団」が権力をもつとアランは考えている。表現こそ違おうが、協業的で農村的な共同体モデルを、アランは結局理想とみなしているのである。

ところで、「農民的構造」によって社会を再建するという考えは、ファシストの主張と親和性が高いと解釈できるだろうか。特にヒトラーは、「農民的構造」の実現に必要な「肥沃な砂漠<sup>55</sup>」の準備に勤しんではいなかっただろうか。さらに言えば、ヒトラーは近代社会を破壊する野心を抱いて、ある面ではアランの主張する理想社会に近いものを打ちたてようとしていなかっただろうか。

たしかに、一見するとファシストとアランの主張が重なるように思われるかもしれない。しかし、アランの政治スタンスとファシストのそれが異なることを念頭に置く必要がある。実際、1944年8月末の日記には、次のように書かれている。

**1944年8月末。**戦争と平和。[…]『ヴィジランス』*Vigilance*<sup>56</sup>を今まで支持してきたのだから、私は政治で誤ったことがない。監視すること、それだけが問題である。監視されれば、独裁政治は無力になり、監視官たちにたじろぐ。以上が当世の暗黙の哲学である<sup>57</sup>。

ここで、アランは反ファシズムの姿勢を鮮明にしている。この事実に基づくと、アランがファシストの政策に賛同し、「農民的構造」の再興を企てていたと考えるのは難しい。

なお、権力者ないし独裁者に対する監視をアランが重視していたことは、ナイーヴに見えるとしても、押さえておいてよい事実だろう。民主主義を圧政に陥らせないようにするには、監視が必要な要素だと考えていたことが看取できるからである。実際1945年の日記において、トクヴィルの主張をたどりながら、アランは次のように述べている。

アメリカの体制は、連邦制によってこの危険 [= 民主主義が圧政に向かうという危険] を解消する *remédie*。連邦制では、国家に圧政の利点と、すべてが知られていて民衆がだまされえない小さな民主主義国家の利点とが備わる<sup>58</sup>。

<sup>55</sup> *Ibid.*, p. 767.

<sup>56</sup> 1939年7月に最終号が刊行された、CVIA（反ファシズム知識人監視委員会）の機関紙。

<sup>57</sup> Alain, *Journal, op. cit.*, p. 626.

<sup>58</sup> *Ibid.*, p. 640, article non daté (1945).

この一節でアランは、アメリカ合衆国の連邦制が「圧政に向かう<sup>59</sup>」民主主義の危険を解決するとしている。なぜなら「小さな民主主義国家」では、民衆の監視によって指導者の行動の「すべてが知られて」おり、その小国家の集合として（一つの）国家が構成されているからである。連邦制では、地方自治と中央集権が両立する点で、民主主義が圧政に陥る危険を克服できるようにアランには思えたのである。

さらに、1946年に起草された一節でも、民主主義における監視の重要性が説かれていることが見てとれる。

アメリカ人たちは単記投票を恐れなかったが、しかし、連邦市町村 *Communes Fédérées* のなかでまず単記投票を実践する必要があるようにアメリカ人たちには思われた。市町村参議会は暴君 *tyrans* にはなりえない。なぜなら、そうした議会是有権者によって知悉され、近くから監視されているからである<sup>60</sup>。

市町村議会で政治的安定性を確保するには、下から上へ指導者を選出する必要がある。監視によって、市町村会議員たちは「暴君」に変わりえない。「農民的構造」の市町村参議会におけるように、この点が連邦民主主義でも重要になるのである。

アランはアメリカの政治制度を信頼しつつける。『日記』の終盤でアメリカの政治制度がふたたび話題になることはその証左だろう。なお次の引用は、1949年に出版されたシモーヌ・ヴェイユ（1909-1943）の試論『根をもつこと』*L'Enracinement* を高く評価しつつ<sup>61</sup>、アメリカの政治体制を教え子が認識していないことをアランが嘆いている箇所である。

**1949年10月19日。** [...] 彼女 [=シモーヌ・ヴェイユ] は、トクヴィルによってアメリカで発見された連邦主義者の解決策を明らかに知らない。そう、代議士ではなく人間を選ばなければならないのだ。手はじめに、市町村参事会員は有権者の監視下にあつて、有権者が知悉し *connaissent* 管理する行政機関によって評価される。この参事会員が今度は有権者になって、市民よりもうまく投票できるであろうことが了解されるのである。こうして市民の意思が国会 *congrès* に到達し、国会自らが、そしてこれらの市町村の有権者全員が、どんな王よりも権限がある大統領と

---

<sup>59</sup> *Ibid.*

<sup>60</sup> *Ibid.*, p. 677, sans date (1946).

<sup>61</sup> 富原真弓「訳者解説」、シモーヌ・ヴェイユ『根をもつこと（下）』、岩波文庫、2010、p.317。

という名の王を選ぶだろう<sup>62</sup>。

たしかに、ここで記されている「農民的構造」とアメリカの選挙プロセスには相違が見受けられる。後者では、「国会に到達する」まで選挙が繰り返されるからである。しかし、まず直接（下から上へ）「ただの市民」（村民）によって、政治家（指導者）が選出されるという考えと、選挙行程が増えれば増えるほど、その分優れた人びとが選出されるという考え（アメリカの場合、最終的に選出された人は、最高「権限」を有する「大統領」となる）は、「農民的構造」における構図とオーバーラップする。ここにおいて、第二次世界大戦以前の「農民的構造」という考えと、アメリカの民主主義に関するアランの考察が結節するのである。

### 3.2 「農民的構造」、反ユダヤ主義、平和主義、民主主義

前節では、アメリカの民主主義に関するアランの考察が「農民的構造」と密接に結びついていることを示した。このことは、アランがとりわけ「農民的構造」の政治面への関心を維持していたことだけでなく、アメリカへの言及が戦後に急増した理由をも示唆している。それでは、「農民的構造」と結びついていた経済的側面や反ユダヤ主義的な考えは、最終的にどのように変化したのだろうか。そして、最終的にどのような共同体が理想とされているのだろうか。最後に、そのことを確認してみたい。

1949年11月9日付の日記において、ガイスマー著『音楽と政治』*Musique et Politique*<sup>63</sup>の所感が述べられている。この書籍では「ナチズムの間の〔ヴィルヘルム・〕フルトヴェングラー〔1886-1954〕の話」が詳細に綴られており、アランは「嫌悪感をもって流し読みした」と日記に記している。ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団所属のユダヤ人たちに対する迫害が活写されていたからである。ユダヤ人に対する迫害、ひいてはその「憎悪の強さ」をアランは嘆いているが、この記述から、この哲学者が「反ユダヤ主義から解放され」と解釈することも可能だろう。実際、以下の二つの引用では、ユダヤ人への批判はまったく見られないのである。

なお、憎悪という観点に立てば「あらゆる暴君は似て」おり、その意見は「国家の法ではなく、警察の法となる」が<sup>64</sup>、「これは軽蔑すべきことである」とアランは評して次のように続ける。

<sup>62</sup> Alain, *Journal*, *op. cit.*, p. 740.

<sup>63</sup> フルトヴェングラーの秘書で「イスラエルの出の」(*ibid.*, p. 762) ベルタ・ガイスマー Berta Geissmar (1892-1949) 著『政治の影における音楽』*Musik im Schatten der Politik* (1945) を仏訳したものか。なお、*Musique et Politique* は1949年に Albin Michel 社から出版されている。

<sup>64</sup> ここでは「国家の法」が民衆を保護する規則を、「警察の法」が権力を濫用可能にする規則を意味していると考えられる。

1949年11月9日。[...] 私は、この著作 [= 『音楽と政治』 ] について昨日モーロワと話し、私たちはアメリカ合衆国が本当の民主主義〔国家〕であると結論した。というのも、アメリカでは反ユダヤ主義者に事欠かないからだ。唯一、人権だけが権利の規定である。管弦楽団から [ユダヤ系の人びとを] 追い払いたがる人は、訴訟するだけでいい。その人は勝訴するだろうが、罰金は莫大になるだろう。私に最良と思われることは、楽団員たちが株主である株式会社で管弦楽団が設立される、ということである。ついこのあいだ設立された株式会社は、ホルンの次席奏者とヴィオラの首席奏者の提唱によるものだった。こうして、各楽団員への給料は法律の庇護のもとにあって、法は厳格である。これが私たちにとっての模範である<sup>65</sup>。

この引用によると、アメリカでは反ユダヤ主義者がユダヤ人を追い出そうとしても、「暴君」の恣意によってではなく、裁判によって処遇が決まる。裁判の結果、たとえユダヤ人の追放に成功したとしても、反ユダヤ主義者には膨大な罰金が課せられる。アメリカでは、ユダヤ人を追放したいという反ユダヤ主義者の願望でさえ「人権」として尊重されるが、憎悪は差別として罰せられる。この意味で、「アメリカ合衆国が本当の民主主義〔国家〕」であるとアランと教え子のモーロワはここで「結論し」ているのである。なお第二次世界大戦以前、株式会社と法律は痛烈な批判の対象だったが、ここではユダヤ人演奏者の平穏を守るものとしてアランに受け入れられている。この点に関しても、アランの考え方の変遷が看取できることを言いそえておきたい。実際、同じ 1949 年 11 月 9 日付の日記で、アランは次のようにつけくわえている。

しかし、私たちは依然として取るに足りない卑劣な振る舞いの時代にいる。「音楽には反ユダヤ主義はまったくくない、云々」。それにもかかわらず、末席のユダヤ人ヴィオラ奏者が電話で迫害されることに変わりはない。「どうしてまだここにいるんだ！ 立ち去りなさい。私たちはあなたを追い出すつもりだ、云々」。この種の迫害は度を失う。アーリア人たちが演奏を拒否するのではないかと人は常に恐れるからである。しかし、まさに逆のことが起きる。ユダヤ人たちが立ち去れば、アーリア人たちが演奏を拒否するのだ！ この点で、圧政は有益である。圧政は本当の感情を呼びおこすが、信用してはいけない。ヒトラーがほとんど成功しかけていたのだから。伝統的な冷静沈着さと、一般人（それが国王の役割それ自体である）として思惟する国王とともに、最後の戦闘を行ったイギリスに敬意を<sup>66</sup>。

<sup>65</sup> Alain, *Journal, op. cit.*, pp. 762-763.

<sup>66</sup> *Ibid.*, p. 763.

この一節でも、アランはユダヤ人に対する迫害を気にかけており、反ユダヤ主義的傾向は見る影もないことが見てとれる。

なお、本稿第2章第1節で引用した1940年7月23日付の日記で、アランは平和を希求し、イギリスの戦闘に反対していた。しかし、アランはこの日記でイギリスに連帯を示している。すなわち、圧政に抗うため、民主主義的かつ理想的な世界を実現するため、アランはここで戦う必要性を認めている。1914年の戦禍を繰り返さないよう、1938年3月に声明を準備し<sup>67</sup>、第二次世界大戦中も平和を希求していたアランにとって、この姿勢は小さくない変化を示唆している。

最後の引用は、「農民的構造」構想とアメリカの民主主義が一体化したことを物語っている。

**1950年10月1日。** […] 選挙は村的に統治されている下層民にとってのみ価値がある。しかし、下層民は敗者 *vaincu* である。そこから農村共和連邦 *fédérations des républiques rurales* の必要性が生じる。この主題については、特にトクヴィルを参照のこと<sup>68</sup>。

前節で示したように、選挙は手はじめに小規模な共同体で行われる必要がある。議員たちの監視がうまく運ぶからであり、圧政を行うような絶対権力の誕生を回避できるからでもある。「選挙」「村的に統治されている」という言葉によって、「農民的構造」の政治面と同じ主題が言い表されているだけでなく、アメリカの民主主義の要素が加わったことで「農村共和連邦 *fédérations des républiques rurales*」と表現しなおされている。「農民的構造」と民主主義という二つの概念がお互いに結びついていること、アランが小規模な農村的民主主義組織を理想とみなしていることは、もはや明らかである。以上から「農民的構造」は、最終的に「農村共和連邦」へと形を変えながらも、1930年代から最晩年に至るまでアランのなかできわめて重要な主題でありつづけたと結論できる。

## 結

本稿では、アランの平和主義、反ユダヤ主義的傾向とアメリカ民主主義への言及を考

<sup>67</sup> [MANIFESTE LANCÉ PAR ALAIN], in *Journal, poèmes, essais* de Jean Giono, éd. publiée sous la dir. de Pierre Citron avec la collaboration de Laurent Fourcaut, Henri Godard, Violaine de Montmollin, André-Alain Morello et Mireille Sacotte, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1995, p. 237.

<sup>68</sup> Alain, *Journal, op. cit.*, p. 812.

慮に入れながら、「農民的構造 *structure paysanne*」の意味と構想内容、「農村共和連邦 *fédérations des républiques rurales*」に至るまでの変遷過程を明らかにしようとした。

第1章では、「農民的構造」を定義したのち、「社会」という言葉と関連づけて解釈を試みた。「農民的構造」は、契約に基づく「社会」を指すのではなく、多様な人びととそれを束ねる指導者が存在し、下から上へと意思疎通が行われる小規模で自治的な農村的共同体のことを指していた。また「農民的構造」は、金融資本主義勢力とは無縁であり、農村における経済循環サイクルに依拠していた。「農民的構造」においては、「家族の延長」に基づいた集団という「社会」の側面が大きく関わっていた。アランによれば、近代文明は「農民的構造」によって理想「社会」として再建される。

第2章では、アランの平和主義がどのようなものであるか、そしてこの哲学者の反ユダヤ主義的傾向がどのように変化したかを示した。第二次世界大戦以前またはその最中、アランはヒトラーの危険性を過小評価し、ナチ・ドイツの占領下にあつては、敗北を受け入れるようフランス国民を説得しているように見えた。この態度は、フランス中心主義に基づいたアランの平和主義の原則に関係していたことがわかった。1940年の日記では、近代西欧に見られるステレオタイプを振りどころとしたアランの反ユダヤ主義的傾向が見てとれた。しかしながら、1943年の日記では、アランが自らの反ユダヤ主義的傾向を過去のものとして捉えていたことが確認できた。1940年から1943年にかけての態度の変化は、強調しておく必要がある。

最後に、「農民的構造」が晩期アランの著作において重要な主題であり続け、最終的にはトクヴィルの思想に結びついて「農村共和連邦」へと変遷したこと、長年アランの関心事だった民主主義と平和主義に関する考察と「農民的構造」が無関係ではないことを示した。第二次世界大戦後、アランが以前ほど金融資本主義社会を批判しなくなったのは、ナチ・ドイツによるユダヤ人の迫害に直面して自らの過失を認めたからというだけでなく、自身の反ユダヤ的傾向を内省したからであるということも確認できた。

上記のほか、本稿で取り上げることができなかった問題も検討に値する。一点目は、(金融)資本主義社会へのアランの批判を、マルクスとプルーダンの主張と比較しながら解釈することである。『わが思索のあと』*Histoire de mes pensées*のなかで、「マルクスとプルーダンを手当たり次第読まなければならなかった<sup>69</sup>」とアランが書いており、その影響が想定されるからである。二点目は、アランとルソーの主張を比較することである。特に、「農民的構造」構想が「社会契約」とどの点で類似しており、どの点で相違しているのかについて、詳細に探求したい。三点目は、『農民たちへの手紙』*Lettres aux paysans*や『空の重さ』*Le Poids du ciel*の記述に基づいて、「農民的構造」に与えたジオノの影響を明らかにすることである。以上の分析については稿を改めたい。

<sup>69</sup> *Histoire de mes pensées*, in *AD*, p. 39 [神谷幹夫訳『わが思索のあと』、岩波書店、2022、p. 57] .